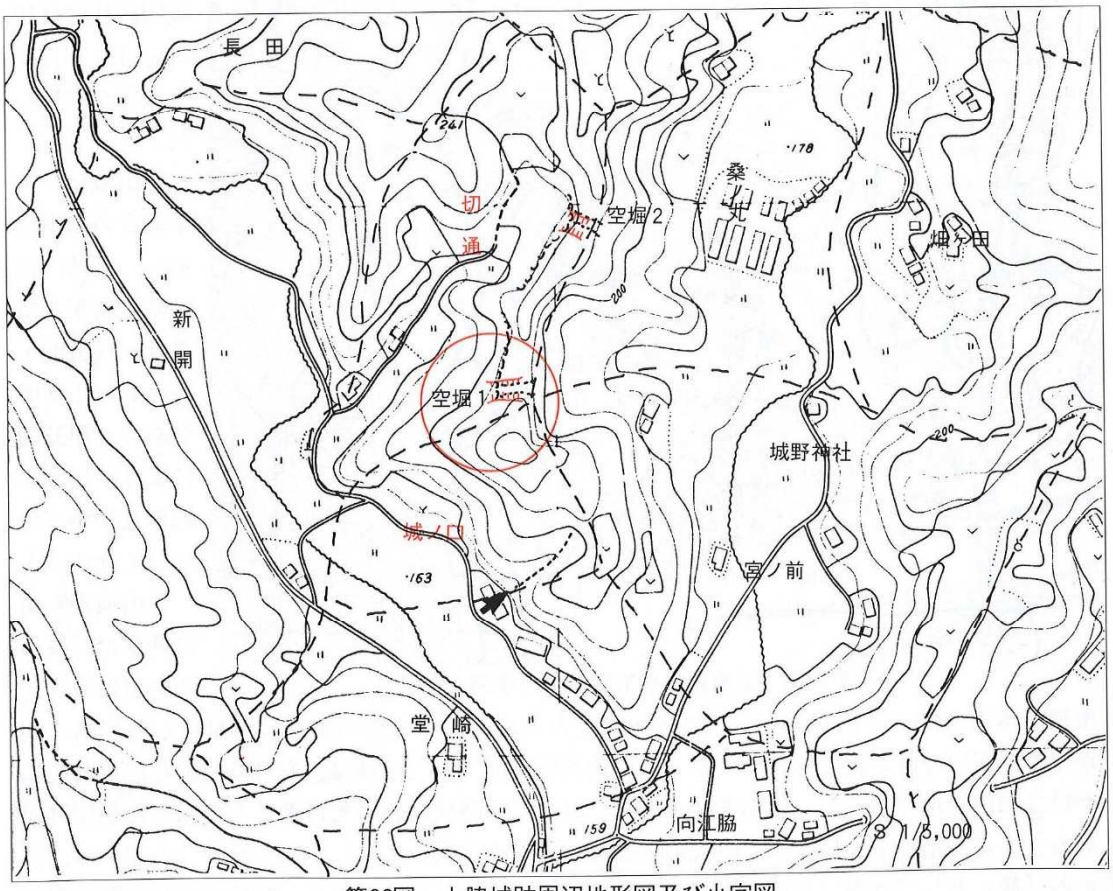
13　上　脇　城　　所在地　木津志　字城ノ口

写真20　上脇城跡遠景

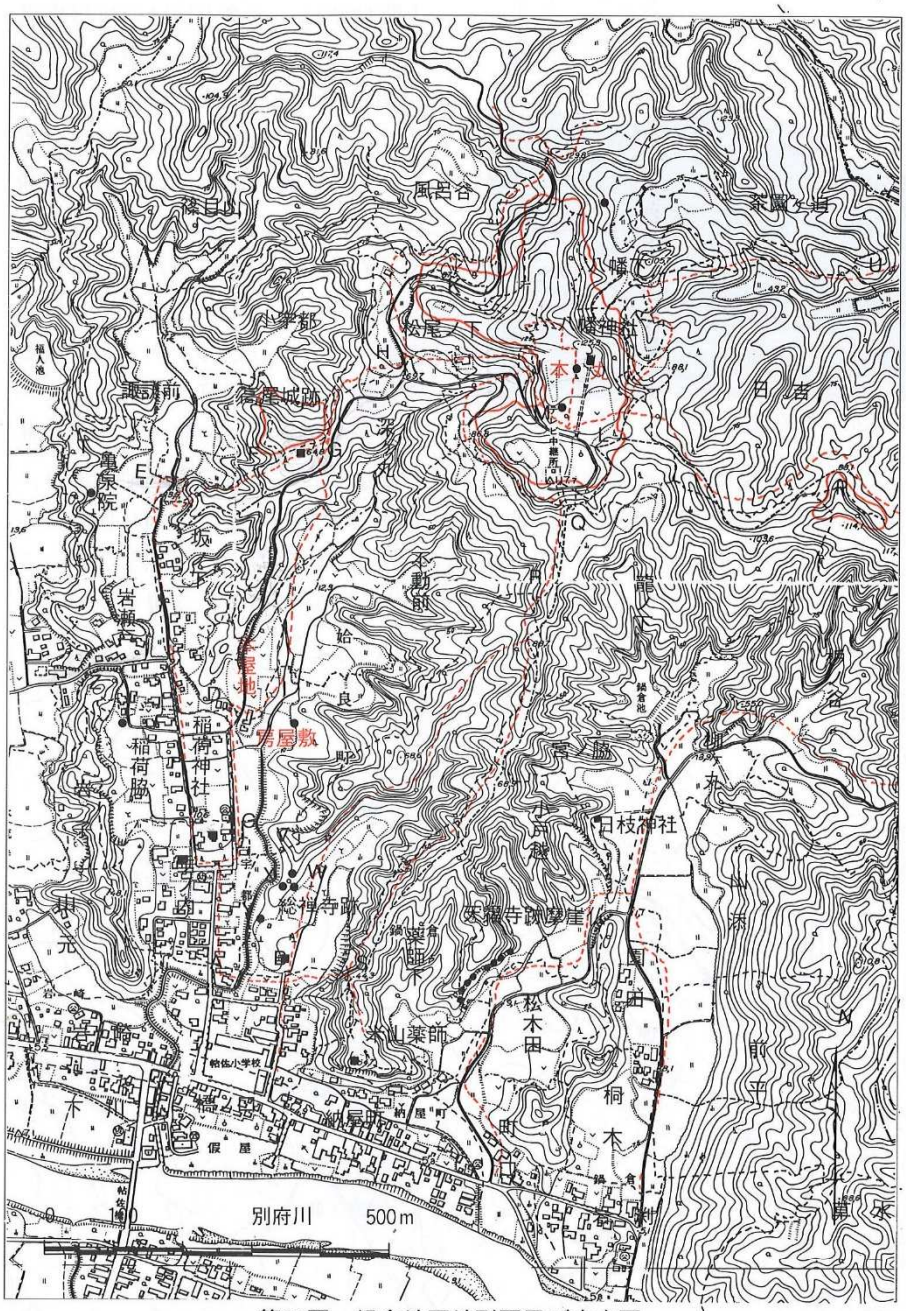
上脇城跡は，木津志地区のほぼ中央に位置し，東側を井田川，西側を上脇川が南へ流れる。標高227.5m，比高差約60mあり，山の上部はシラスで覆われている。城域は小字城ノ口・切通に含まれ，大手口は木津志1951番地の福岡公春氏宅裏手と思われる。福岡氏宅では，昔から裏山への出入口は氏神様の通り道という信仰があり，母屋と馬屋の間を離して建築している。

大手口を直進して中腹より北西に進むと山頂に至る。途中には明確な削平地は確認されない。山頂は40m×17mの平坦地であり，東西は急涯となっている。南側は緩斜面となり，曲輪とは判断できなかった。山頂北側には通路があり，約6mほど下がると，幅約3mの犬走り状の部分があり，両端は空堀状となる。さらに北へ馬の背状の尾根が伸び，犬走り部から約30m先に空堀1，約70m先に空堀2がある。



第32図　上脇城跡周辺地形図及び小字図

１４　平山城・高尾城　　所在地　鍋倉字本丸，松尾ノ下他



第33図　鍋倉地区地形図及び小字図

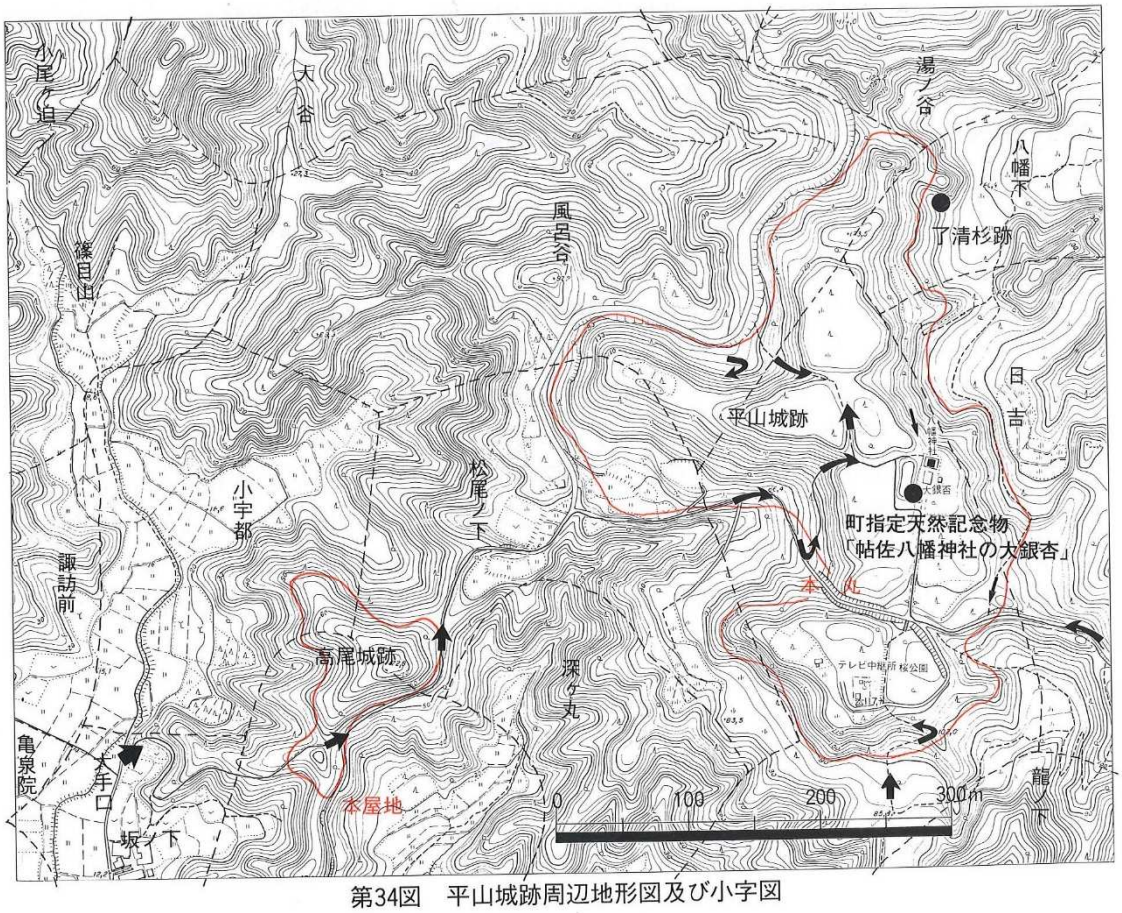
弘安５(1282)年，京都の石清水八幡宮の法橋法眼了清は，正八幡宮の神官として帖佐郷の平山村領家職を得て，帖佐郷へ入った①。平山城は了清が築いたといわれ，別名平安城・帖佐本城ともいう。この後，室町時代に島津忠康，戦国時代には辺川忠直・祁答院重武等が在城した。

平山城は，大字鍋倉の山中にあり，城域内には帖佐新正八幡神社・桜公園・各テレビ中継所がある。**第33図**により，周辺の地形及び小字について詳述する。

平山城から南に延びた丘陵は別府川に迫り，南端の米山薬師では絶壁となる。この尾根と東西に対峙するかのように亀泉院から岩崎に向かって断崖の丘陵が細く延びている。この両丘陵に囲まれた地域は，室町時代から江戸時代にかけての中心地であった。米山薬師の南麓には，江戸時代物資の集散地として栄えた納屋町がある。また，帖佐小学校は江戸時代帖佐郷の仮屋（小字仮屋馬場）があったところであり，広義の「麓」としては西の上麓，川南の高樋まで含まれると推測される。帖佐小学校西側の町道

写真21　平山城跡遠景(南から望む)

を北上すると，島津義弘の館であった御屋地跡（現稲荷神社）に突き当たる。東側は小字房屋敷，北側には本屋地があり，北西には小字坂ノ下がある。大手口については，小字坂ノ下を通る旧道E～Fと推測される。この道はFを抜けてGに至るまで，高尾城の監視下にあるからである。搦手口は城の東P～Lの尾根道と思われる。その他に平山城への進入路は，1)米山薬師の西側参道から尾根道を通って桜公園下へ至る道，2)総禅寺跡を北上してRへ至る道（総禅寺口か），3)加治木から東の城経由の道，4)小字八幡下からLへ至る道など複数考えられる。



第34図　平山城跡周辺地形図及び小字図

平山城と高尾城の遺構が確認された城域を赤線で示したものが**第34図**である。**第33図**の小字本丸東側にある赤線内P区域は，東の城と想定した。大手口は，**第34図**中H地点から東へ折れ，J又はMへ別れる。現在M～Lを抜ける町道があるが，この道は昭和10(1935)年に八幡神社の参道改修工事の際②，地下げを伴う大規模な道路改良工事が行われたと考えられる③。

今回実測調査を実施した平山城を**第35図**により以下詳述したい。城域は空堀によって大きく7区分してみた。南から順に説明すると，町道稲荷・木田線（空堀14）によって南北に分けられる。つまり，曲輪25を頂点とした西の曲輪26～29と破壊を受けたと思われる曲輪30から構成される一群である。曲輪25の北側には，土塁6・土塁7が空堀14から侵入する敵に備えている。曲輪25南側Gは，H・Jのテレビ放送受信塔の管理用道路であり，曲輪25への連絡路は空堀6から空堀13を利用したと考えられる。曲輪30は現在桜公園となっており，地下げが行われ，空堀6の南端は不鮮明である。米山薬師へ通じる通路Mは，後世のものであろう。

次に，城内で最も大きな空堀4によって，東西に二分できる。西側は立体的な曲輪構成であり，空堀5によってさらに細分される。曲輪20は独立した曲輪であり，Cには増長院の僧侶墓がある。北側は曲輪16を頂点として曲輪17～19が，空堀4に対して階段状に低くなる。空堀4の東側には，八幡神社境内である曲輪22と南へ延びる参道を含む曲輪23・24からなる曲輪群がある。神社社殿を土塁1が取り囲む。曲輪22は上下2段となり，下段Pには空堀4への出入口が設けられている。また，Bには姶良町指定天然記念物の大銀杏がある。曲輪24は桜公園駐車場として造成工事がなされているため，原地形はとどめていない。

大手口から空堀7を登り切ると，空堀4のD地点に至る。ここを境に北側が一段高くなる。空堀3は南北に走り，東西に曲輪11と曲輪12に別れる。曲輪12の西端には土塁4があり，虎口を守る。一段下には曲輪14と曲輪15が西へ延びる。曲輪14の東には，土塁5が空堀10とともに虎口を構成し，Rからの侵入に備える。曲輪14と曲輪12の高低差は約10mあり，他の曲輪と比較して最も低い位置にある。

空堀2・1に挟まれた曲輪1は，城内での最高所である。曲輪1は南北約80m×東西36mあり，確認できる曲輪の中では最大の広さである。東には曲輪2と階段状の曲輪3～5がある。

空堀1の北側には，曲輪6を中心とした曲輪群がある。曲輪7は曲輪3～5と共にT方向からの敵の侵入に備えていると考えられる。また，曲輪8には曲輪1の北西角が崩壊したと思われる土砂が堆積している。曲輪8・10から南への移動は，空堀9により遮られている。

また，空堀4を北へ下っていくと，平山了清を葬ったと伝えられる場所に至る。

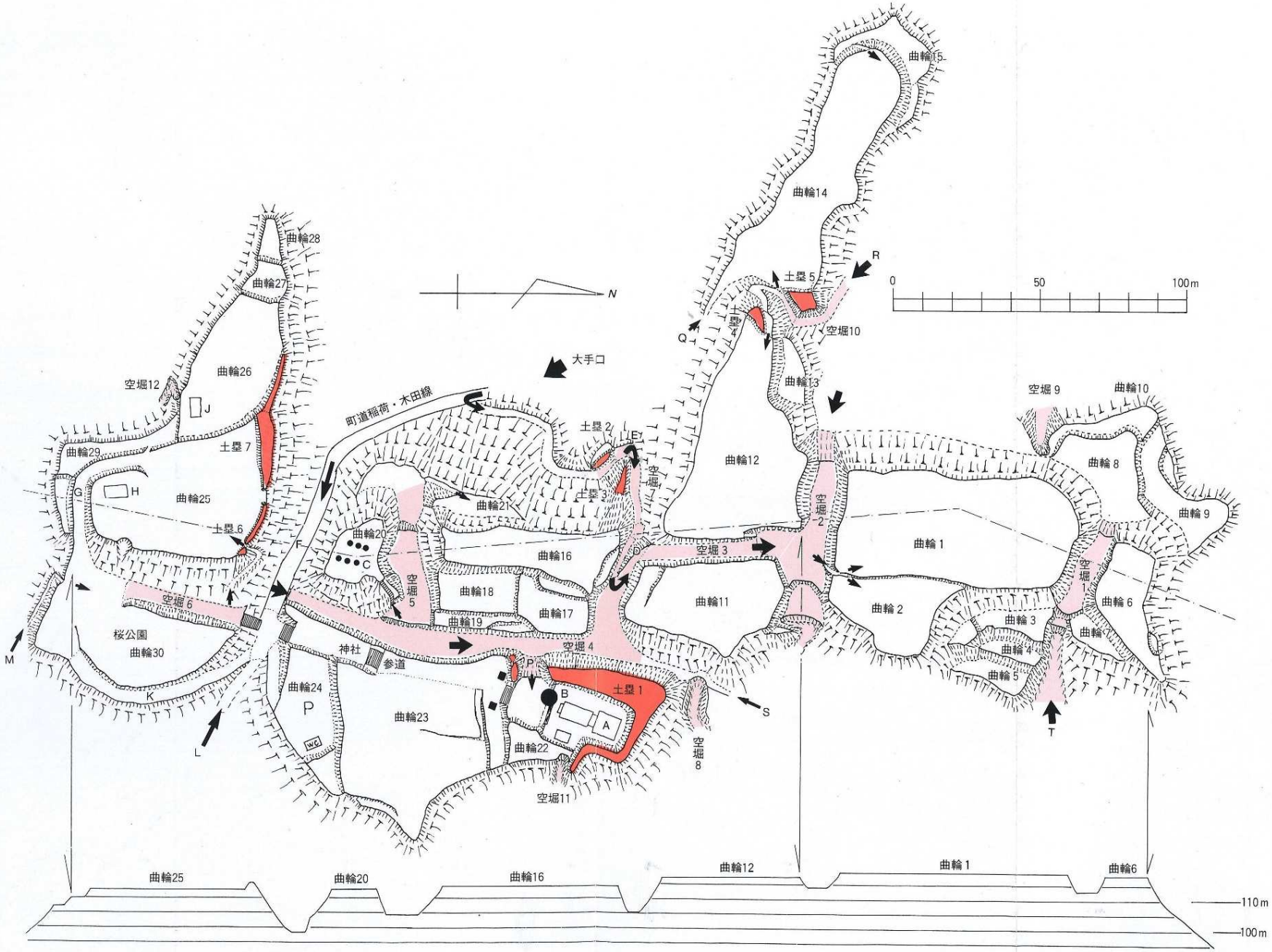
なお，**第35図**には掲載できなかったが，**第33図**中P地点には上下2段の曲輪からなる「東の城」と想定できる遺構がある。上段には一部土塁が残り，北側を加治木へ抜ける尾根道が通る。この尾根より北は小字日吉であり，Pを南に下る道が山王坂であろうか。

最後に，今回の平山城の調査区域については，八幡神社を中心とした山頂部を重点的に実測し，土塁や空堀が確認できない斜面及び山麓の平坦地は，調査対象から除外したため，今後の発掘調査等により城域が拡大する可能性を指摘しておきたい。

註①第2章　中世の姶良と山城　3鎌倉後期　13頁

②平成4(1992)年　姶良町歴史民俗資料館発行　「写真に見る姶良町の今昔」10頁

③明治42(1909)年　大日本帝国陸地測量部発行　「二万分一地形図鹿児島近傍一號　帖佐」



第35図　平山城跡実測要図（折込み）

○高　尾　城

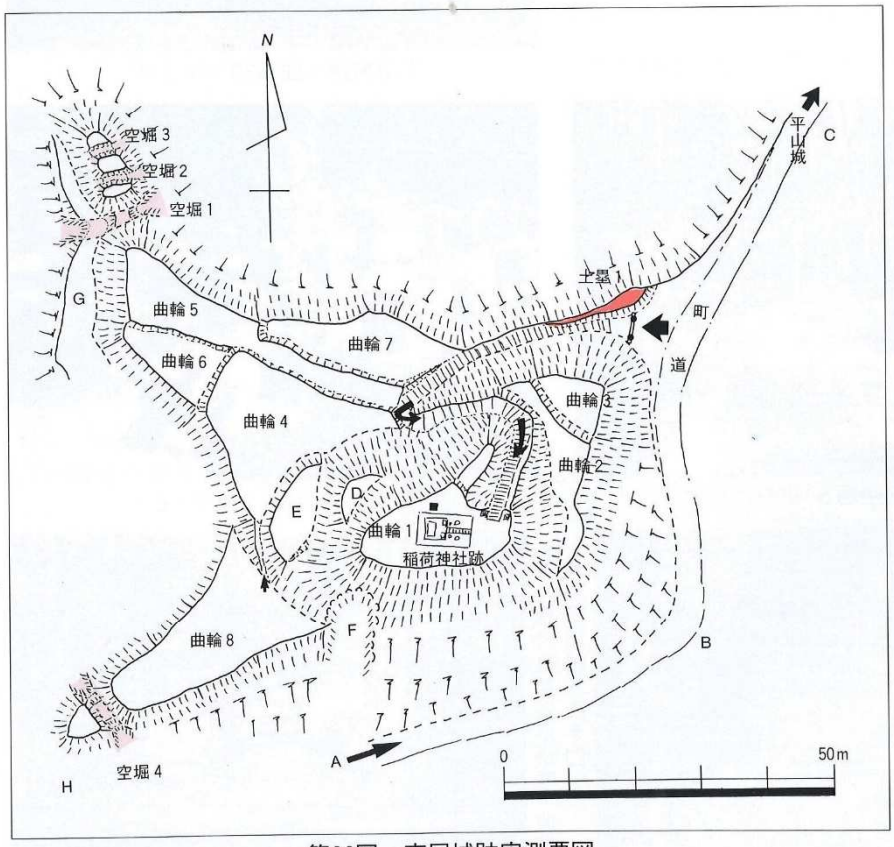
高尾城では，戦国時代の明應４(1495)年に辺川忠直と加治木領主加治木久平との間で戦があり，大永６(1526)年には薩州家実久方に組した辺川忠直と島津忠良との間で戦が行われている。

慶長３(1598)年12月，高尾城の山頂に稲荷神社が勧請された。これは，同年10月，朝鮮の新寨における戦いで，窮地の島津軍を勝利に導いた狐を祭ったものである。稲荷神社は，その後崖崩れの心配から，文政10(1827)年２月に現在地の御屋地跡に移され①，現在に至っている。また，高尾城の入り口には，現在鳥居のみが残されており，山頂には石灯籠等が残っている。地区の人々は，今でも高尾城の事を「元稲荷」と呼んでいる。

高尾城に至る本来の道筋は，**第33図**で述べた通り，小字亀泉院・Ｅ地点から旧道にはいり，Ｆ地点を経由して，**第36図**の高尾城南麓の町道Ａ地点に達する道と考えられる。

高尾城の城跡一帯は，北から延びた小字松尾の下に含まれる。城跡外の西側斜面は，小字諏訪前，北側斜面は，小字小字都である。以下，城の遺構について，**第36図**により説明をする。

町道上のＡ～Ｂを経て，鳥居をくぐり参道を進むと，踊り場で東へ大きく折れる。この西側には，曲輪４を中心に，北に一段低い曲輪５と曲輪７，西側に曲輪６が確認された。西側斜面下には，曲輪５・６・４を巡る帯曲輪状のＧがある。曲輪５の北西端には，尾根伝いの侵入を防ぐ空堀１があり，その北にはさらに小規模な空堀２・３が掘られている。曲輪４の南には曲輪８と通じる小道があり，西端には空堀４が切られている。



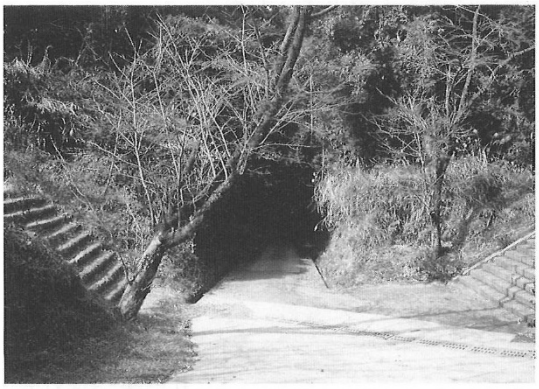
第36図　高尾城跡実測要図

再び参道に戻り，東へ進むと，約２ｍ下に曲輪２と曲輪３がある。参道を登りきると，東西に長い曲輪１がある。現町道との高低差は約12ｍほどある。なお，Ｆ地点は空堀ではなく自然崩壊箇所である。

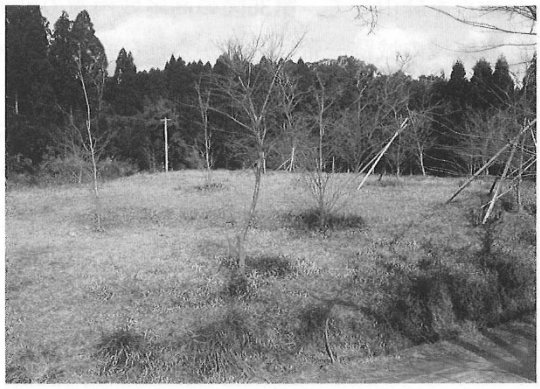
註①「三国名勝図絵」巻三十八　高麗稲荷神社

平山城跡・空堀 4（南から写す。左手は曲輪19）

帖佐新正八幡神社（曲輪22内）



平山城跡・空堀14（東から臨む。右手階段は神社参道）



平山城跡・曲輪30（現桜公園）

平山城跡・空堀 5（東から写す）

増長院住職墓（曲輪20・C）

◀高尾城跡・大手口

▶稲荷神社跡（高尾城跡・曲輪1）

写真22　平山城跡・帖佐八幡神社・高尾城跡

15　帖　佐　館　　所在地　鍋倉字垂ノ内・稲荷脇

写真23　帖佐館跡遠景

県道川内・加治木線に面した帖佐小学校西側の町道を北へ約300m進むと，周囲を石垣に囲まれた帖佐の稲荷神社へ突き当たる。ここが，島津義弘の居館であった帖佐館跡である（**第37図**参照）。

この館跡の石垣は，島津義弘が居館した時代の遺構として，昭和38年９月に姶良町指定史跡「宇都御屋地跡石垣」に指定された。

帖佐館の周辺地形及び小字について，**第37図**により説明したい。帖佐館内には，小字垂ノ内・稲荷脇の小字境が東西に走る。稲荷神社敷地（鍋倉779-1）・宇都自治公民館敷地（鍋倉777-1,-2）より以北は小字稲荷脇であり，社殿前境内（鍋倉776）以南は垂ノ内に含まれる。垂ノ内の小字境は，館の南西部で複雑に入り込んでおり，館正面前に大手口として何らかの工夫が施されていたと想像される。館の東側には小字房屋敷があり，山裾には義弘が茶の湯に用いたと言われる御茶ノ水（井戸）がある。

館の北側には小字本屋地がある。この地名は義弘が宇都御屋地に館を築く以前に，古い館があったことを予想させる。つまり，二つの屋地の存在は，戦国時代に平山城麓に形成されていたであろう城下町の変遷を知る数少ない手掛かりである。しかしながら，本屋地ではまだ遺構は確認されていない。

本屋地の西隣りには小字岩瀬戸があり，南の山裾には古帖佐焼宇都窯跡がある。宇都窯は義弘が朝鮮から連れ帰った陶工金海によって開かれた半地下式の窯である。金海はこの窯で茶入れや茶碗などを焼いたと言われている。「古帖佐焼宇都窯跡」は昭和38年９月に姶良町指定史跡に指定された。垂ノ内の南には，門前川をはさんで小字仮屋馬場がある。帖佐小学校には，江戸時代に帖佐郷の仮屋が置かれていた。

仮屋馬場の北東にある小字総禅寺は，豊州家島津氏が季久没後に建立した総禅寺に因む。**第37図**中Ａは初代島津季久の墓（昭和49年５月町指定史跡），Ｂは島津朝久の墓（同上），Ｃは御屋地様の墓（同上），Ｄは島津歳久の墓跡である。

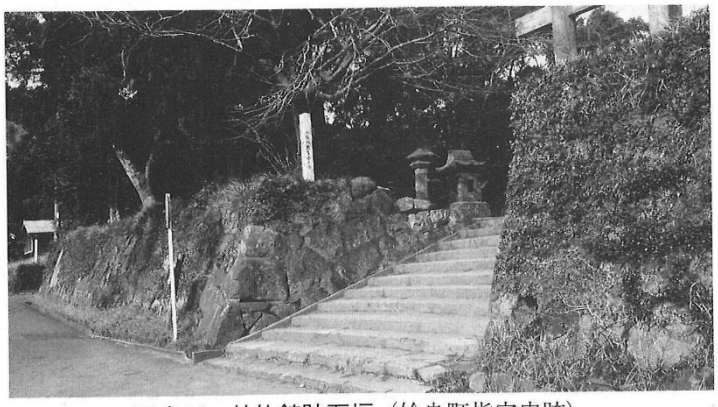
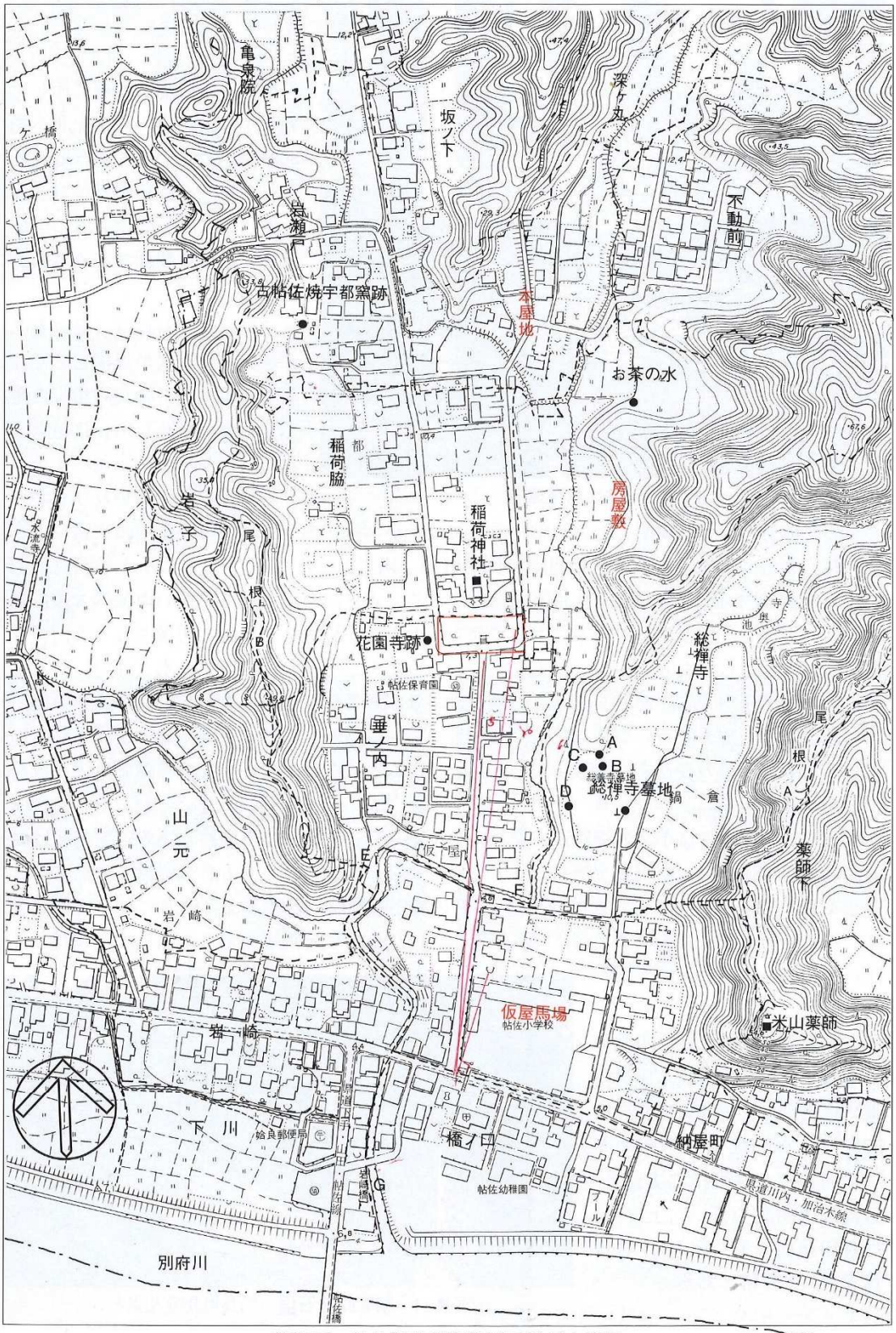


写真24　帖佐館跡石垣（姶良町指定史跡）



第37図　帖佐館跡周辺地形図及び小字図

帖佐館の周辺地形について概観すると，東には平山城から細長く延びた尾根が２本に別れて南へ延びる。一つは納屋町に達し，南端の山頂には米山薬師がある（尾根Ａ）。もう一本の尾根は，総禅寺墓地の北側に至る。西側にも南北に延びる尾根があり，標高は約30～50ｍある（尾根Ｂ）。帖佐館は，天然の城壁とも呼べる東西の尾根Ａ・Ｂによって守られている。

館の東を南流する門前川は，帖佐小学校北側で西におれ，尾根２の先端に向かい，山裾で南に折れて別府川に注ぐ。この門前川の流路について，次の仮説を立ててみた。門前川は帖佐館建設時に関連工事として河川改修が行われたのではないか，という可能性である。つまり，図中Ｅ～Ｆは，館南の防衛線としての水堀であり，Ｇ～Ｅは同じく西からの敵に対して，仮屋馬場・橋ノ口・納屋町を守る水堀としてあるのではないだろうか。何ら確証はないが，帖佐館の城下も含めた総構えという観点から今後の課題として指摘しておきたい。

また，南には川幅100ｍを超える別府川が西から東へ流れる。小字納屋町には，船着き場があり，江戸時代（或いはそれ以前）から物資の集散地として栄え，錦江湾を行き来する船で賑わったという。

帖佐館と北東の平山城との関係については，戦時の山城である平山城に対して，帖佐館は日常の政務や居住の場所であった。館正面から小字坂ノ下の登り口まで約450ｍである。

ここで，帖佐館に関する文献資料を見てみたい。帖佐古記録[①]（宝暦以後）によれば，

「義弘公御屋敷築の事

文禄四年乙未義弘公栗野より帖佐へ御在城候処有之、築地九十九間にて御国御屋敷作御造営也。士卒子の如くなりて営事を難とせず、是に教道の人心を結るるごとかくの如し。日あらずして御普請御成就有之也。

御屋敷の御普請の儀、諸士迄を以御成就也。石垣石岩の嶽より引、阿多長寿院御加勢石今に其名あり。」

「帖佐御屋敷へ御在居次第

義弘公加治木へ被移御在居　島津豊後守殿御地頭職にて御屋敷へ御移り、其以後鹿児島東福寺城に被成御移候。其後には義弘公の嫡女御屋地様と申被成御座候。宝寿院さま御跡目御定被成、是も当御屋敷に被成御座候。左候て鹿児島のように御移以後御還俗被成島津市正殿と申候。其後帖佐御屋地にて御座候節、中納言様より御経所堂御立被進候を後御屋敷へ御残置代々御祈願所に被定置候。今の花園寺なり。」とある。

義弘は文禄４(1595)年に栗野より帖佐へ移り，館を造営した。家老新納旅庵が工事の監督をとり，石垣石を岩の嶽（加治木町湯湾岳）から運んだ。義弘は慶長11(1606)年平松に移るまでこの館に住んだ。その後館には，島津豊後守久賀・御屋地様（島津豊後守朝久の妻）・島津市正忠広（家久三男・長賢坊）が居住したことを伝えている[②]。また，館造営時に義弘屋敷地としては，祈願所（後の花園寺・現鍋倉775-3)も含まれており，石垣は今より西へ延びていたと考えられる。この花園寺跡と神社境内を合わせて「築地九十九間」とほぼ符合するようである。

館内について，帖佐古記録の記述を踏まえて**第38図**により説明したい。現在の館跡は，稲荷神社境内を含み，東西（石垣正面）約69ｍ・南北（石垣東面）約69ｍの規模である。周囲には高さ平均約３ｍの石垣が積まれ，道路面より約２ｍほど高くなっている。石垣の南東角（**第39図**中Ｃ）は，直角に積まれていたが，昭和60年に現在の姿に積み替えられた。東面の石垣も崩壊の危険があったため，平成４年に修復された。また，西側には石垣が南に一部しか残存しな